

2021年12月

氷積の章

尾池和夫選

影笛の御簾に秋風動きけり
今生の一句を胸に月今宵
歩みゆく先へ先へと虫の声
消えてなほしばし仰ぎぬ秋の虹
秋の夜や仕上げの鑿の当て所

霞袂集
尾池葉子
長野眞久
大島幸男
原 稔
余米重則

木の実踏む音の乾きや遺髪塚
たんこぶを撫でてゆきたる蜻蛉かな
稲刈鎌片目閉ぢ診る研ぎ具合
かたくなに補聴器拒み鬼城の忌
嶋立つに法師の歌を思ひみる

氷凌集
中嶋文子
大口彰子
伊藤武敏
羽鳥正子
高橋千画子

2021年11月

氷積の章

尾池和夫選

草刈の神域なれば白き服
草くぐる水やはらかき今朝の秋
雨跡のまだらに乾く路地の秋
秋めくや北より抜くる風の道
星月夜ファドの流るる坂の路地

霞袂集
尾池葉子
長野眞久
大島幸男
原 稔
余米重則

盆僧の無言に正す膳の向き
消ゴムに破るる紙や秋暑し
夕闇や恐竜のごと墓の狩
草は穂に車堰とふ水車跡
川風のきのふと違ふ今朝の秋

氷凌集
中嶋文子
大口彰子
伊藤武敏
佐藤美智子
吉田恭子

2021年10月

氷積の章

尾池和夫選

聖鐘や大夕焼に漂ひて

霞袂集
友永美代子

留学生老いて親しむ麦茶かな
長きもの啜へ蜥蜴の後退る
大丸も祇園祭の大暖簾
噴水の止むとき我に返るとき

尾池葉子
長野眞久
大島幸男
三和幸一

泡盛や南極点へ地図の旅
海中へ鳥の一撃雲の峰
藍甕の藍のぬくみや秋隣
山の子の川は遊び場箱眼鏡
ざつくりと祖父手作りの棕櫚団扇

氷凌集
伊藤武敏
中嶋文子
高橋千画子
羽鳥正子
宮城節子

2021年9月

氷積の章

尾池和夫選

海よりの風が街まで吊忍
葛切や煙雨流るる山の襷
かはほりや駅の階段かく長さ
草原のゲルの一夜や明易し
月蝕の終はり見届け蝸牛

霞袂集
尾池葉子
長野眞久
大島幸男
原 稔
余米重則

ダービーやたてがみ撫づる勝負服
夜濯にけふの失敗流しけり
まだ暮れぬ日をもてあまし更衣
艫を棹に変へ大川の遊び舟
打水や鉄平石に色新た

氷凌集
伊藤武敏
中嶋文子
高橋キセ子
重富國宏
城島千鶴

2021年8月

氷積の章

尾池和夫選

新緑や卒寿の背筋伸ばし行く
帰るさのやたら目立ちて夏蕨
月の出ていま竹皮を脱ぐところ
可杯や鯉のたたき大皿に
津波来し沖の記憶や卯波立つ

霞袂集
友永美代子
尾池葉子
長野眞久
岡橋啓二
余米重則

式典の帽子はみどり植樹祭
不発弾朽ち果つるまま復帰の日
音出さぬ祭太鼓が先導す
つなぐ手を大きく揺らす麦の秋
天空に補助線引かむ梅雨の星

氷凌集
中嶋文子
屋嘉比順子
吉田恭子
大口彰子
四宮陽一

2021年7月

氷積の章

尾池和夫選

故郷に似て坂多き町燕来る
剪定や先祖返りの新葉出て
蝶よそこは二十歳に逝きし兵の墓
花まつり稚児の仕上の位星
春愁や生き足りしとも足りぬとも

霞袂集
友永美代子
尾池葉子
長野眞久
大島幸男
原 稔

ヘルメット脱げば甘党花の昼
フェルメールの窓辺は左春日影
嵯峨御所の池に島かや花筏
かげろふや基地建設の地に遺骨
嗣治の乳白色や春闌くる

氷凌集
中嶋文子
四宮陽一
重富國宏
宮城節子
伊藤武敏

2021年6月

氷積の章

尾池和夫選

流れ行く雲は何処へ麦の秋
包みても水のこぼるる磯菜摘
椿浮くあたりへ投げて鯉の餌
鴨引きて年縞残る水月湖
春泥の長靴のまま数学者

霞袂集
友永美代子
尾池葉子
長野眞久
原 稔
余米重則

荒川の草焼く原や風は火に
燻製の煙の香る雪解道
涅槃図の壁一面の悲嘆かな
竜天に登り解けたるわだかまり

氷凌集
伊藤武敏
中嶋文子
吉田多々詩
佐藤美智子

蝶生る空の高さをまだ知らず

渋谷啓子

2021年5月

氷積の章

尾池和夫選

霞袂集

雛飾る卒寿の小部屋艶めきて
氷河期の名残の池よ蓐生ふ
古草の身を起したる日差かな
大陸の砂が層なす雪の壁
彫像の鼻先にある余寒かな

友永美代子
尾池葉子
長野眞久
大島幸男
余米重則

氷凌集

落日のはやき山間楮干す
黒鍵の角の磨り減り寒の朝
切落とす林檎の枝や木の根明く
密室を作り上げたる春の雪
くゆらせるやうに出でたるしやぼん玉

伊藤武敏
中嶋文子
高橋キセ子
四宮陽一
大口彰子

2021年4月

氷積の章

尾池和夫選

霞袂集

久女忌や窓を揺がす風の音
初富士や白帆と見ゆるものはなく
猫の皿に日の当りをる三日かな
みづうみはわが町のかほ初景色
暗きより寄せ来る浪や初茜

友永美代子
尾池葉子
長野眞久
原 稔
岡橋啓二

氷凌集

水鳥の棲処ぞ埋めたつる重機
せつかちと言はるる口調浮寝鳥
すつてんと独りずまふや凍つる朝
吉凶はごまめの味の出来不出来
三歳の気ままたふとし初詣

伊藤武敏
大口彰子
中嶋文子
重富國宏
佐藤美智子

2021年3月

氷積の章

尾池和夫選

幾度も自問自答の十二月
鳩ここより瀬田は川の波
万星の凍てて大地にある微熱
振り返りつつ歩み去る冬の鷺
枯蓮や鈍角ありて鋭角も

霞袂集
友永美代子
尾池葉子
長野眞久
大島幸男
余米重則

メルカトルの世界地図かけ冬ごもる
労きの肩沈めたる柚子湯かな
達筆の墨の香円き漱石忌
極月の海より暮るる離島かな
顔見世に大向うなき楽日かな

氷凌集
伊藤武敏
吉田多々詩
大口彰子
屋嘉比順子
四宮陽一

2021年2月

氷積の章

尾池和夫選

石橋のまなかの窪み露凍る
神の旅かの狼を供として
凧やつひに根付かぬ一樹あり
気嵐を切り裂く音や漁船
浮玉の網の朽ち果て冬の浜

霞袂集
尾池葉子
長野眞久
大島幸男
岡橋啓二
余米重則

奥利根は石ごろごろと水の秋
山茶花や隙間に隠す宝物
谿深く岐るる流れ鴉の声
室咲や画廊に大理石の月
ひとりづつストーブに寄る舞台袖

氷凌集
伊藤武敏
大口彰子
重富國宏
佐藤美智子
中嶋文子

2021年1月

氷積の章

尾池和夫選

この谷にまだ先のある葛の花
葛咲いてこんな日にこそひだる神
裏年の柿に没日の速さかな
独酌を思はず過ごし鹿鳴く夜

霞袂集
尾池 葉子
長野 眞久
大島 幸男
原 稔

高稲架の投げ手受け手の調子よき

余米 重則

蛇穴に入るや知恵の輪元通り
鯖雲や出雲へ行かぬ道祖神
鳶の影いよよ低きを穴まどひ
大泣きの今日の我慢よ夜寒の子
けふの風吉兆として去ぬ燕

氷凌集

大口 彰子
伊藤 武敏
高橋キセ子
佐藤美智子
重富 國宏